

クリティカル・リーディング 考えるための技術

三森ゆりか

欧米諸国には、情報を分析して解釈し、批判的に検討するための技術を学校教育の中で段階的、系統的に指導する伝統がある。例えばドイツでは、この技術を Interpretation (インタープレタチオン) と呼ぶし、米国では Critical Reading (クリティカル・リーディング) と呼ぶ。名称は各国で異なるが、内容はほぼ同じである。

このクリティカル・リーディングが具体的にどのようなものであるか、国語の授業を例にとって説明しよう。なぜなら、クリティカル・リーディングの基礎基本は、まず文学作品(詩、物語、短編・長編小説、ショートストーリー)などで指導されるのが一般的だからである。クリティカル・リーディングには、二段階ある。テキストを科学的、分析的、論理的、客観的に厳密に検討し、何が書かれているのかを解釈する第一段階、そして、その解釈を踏まえてテキストを批判的に検討する、つまりテキストに哲学的考察を加える第二段階である。

第一段階は、まずテキストを熟読するところから始まる。テキストを熟読したら、教師を中心に全員で討論しながら授業が進められる。ただし、討論は、ただ思いつきの意見を語ったり、印象批評を述べたりするのではなく、分析と解釈をするための指標に則って行う。この指標とは、おおむね「構造・筋(プロット)・スタイル・視点・時制・設定・登場人物・調子(トーン)・語彙・象徴・主題」などである。一つのテキストを、これらの指標に則って分析し、解釈すると、例えば次のようなことを考えることになる。

どのような構造になっているか。その構造は「物語」の内容にどのような影響を与えているか/どのような筋になっているか。事件が生み出す葛藤は緊迫感を保つように並べられているか/どのようなスタイルで文章が書かれているか。シンプルな文体か/どの視点から「物語」が書かれているか。第一人称の視点か。すべてを知っている作者の視点か/どの時制で書かれているか。その意味は何か/どのような時代背景で設定されているか。物語と時代はどのようにかわっているか/登場人物はどのような役割を果たしているか。名前の持つ意味、心理

状態、行動の意味、性格の意味など/明るい調子(トーン)か/ミステリアスな調子か/独特な語彙の使用が認められるか/象徴されているものはあるか/主題は何か。

第一段階では、こうした指標に沿って、テキストに真摯に対峙し、テキストの行と行間から自分自身が納得する解釈を引き出し、それを論証しながら論じ合う。

第二段階は、テキストの批判的検討と哲学的考察を行う。ここで言う「批判的」とは、テキストの不備を指摘するというような否定的な意味ではなく、テキストに対する自分自身の前向きで建設的な考察を組み立てることである。ここでは、例えば次のような検討をする。

主人公の行為は正しかったのか。自分だったらどのような行動をしたか/もし「事件」が発生しなかったらどのような展開になっていたか/設定された時代の中で登場人物は他になすべきことがなかったのか/扱われた「事件」は現実存在するか/現実の社会ではどのような形で「事件」は現れるか。それを経験したことはあるか。

クリティカル・リーディングの基本は、第一に熟読である。単なる思いつきや感想は認められないので、文や語彙、文法に十分な注意を払いながら

こうしたクリティカル・リーディングの技術は、文学作品のみならず、歴史や社会学、哲学、政治、経済といたった実生活において重要な学問や時事問題から、音楽や美術といった芸術分野まで広く応用される。欧米人が、数人集まるとすぐに議論や討論を始められる秘訣は、実はクリティカル・リーディングという技術を共有しているからなのである。現在しきりに「考える教育」と「生きる力」の必要性が唱えられているが、そのためになをなすべきかは議論されていない。「生きる力」を育むためにはクリティカル・リーディングこそ最適だ。

(つくば言語技術教育研究所)